

史 跡 生 目 古 墳 群

— 保存整備事業 発掘調査概要報告書VII —



2007

宮崎市教育委員会

# 序

国指定史跡生日古墳群は、平成10年度から保存整備のための確認調査を進めてまいりました。古墳群内には100m級の前期の前方後円墳を九州で唯一3基備え、調査以前から、注目されていました。加えて、これまでの調査では、前方後円墳に伴う地下式横穴墓の存在が明らかになり、古墳時代における墓制の研究、中央と地方豪族との関係を研究する上でも貴重な資料が増えてきております。

生日古墳群は平成20年度の史跡公園の開園を目指し、現在整備工事をおこなっている最中であります。事業開始前のひっそりとした山林の姿とは様変わりしてしまいましたが、先ず貴重な文化財の保護を第一として、それを取り巻いていた当時の古代環境の復原、そして、これまでに培われた現在の緑と文化財の共生を念頭に置きながら、市民の皆様に親しまれる史跡公園を造ってまいりたいと考えております。

今回、ご報告いたします本書が古墳研究の一助となり、活用されますことを願っております。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご助言をいただきました諸先生方、発掘調査に従事された作業員の皆様に心より感謝申し上げます。

平成19年3月

宮崎市教育委員会

教育長 田 原 健 二

# 例　　言

1. 本書は史跡生目古墳群保存整備事業に伴う平成17年度の発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成17年12月1日～平成18年3月31日の期間実施した。
3. 発掘調査により出土した遺物及び調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。

## 4. 調査組織

調査主体　宮崎市教育委員会

(17年度)

文化振興課	課長	野田 清孝
文化財係	係長	米良 明信
調査事務	主任主事	松木 勇道
調査員	主任技師	稻岡 洋道
々	嘱託	井上 誠二

(18年度)

文化振興課	課長	野田 清孝
文化財係	主任兼係長	山田 典嗣
調査事務	主任主事	鳥枝 誠
調査員	主任技師	稻岡 洋道
々	嘱託	井上 誠二
補助員	々	稻元久美子
々	々	永友加奈子
々	々	徳丸 理奈

5. 本書の執筆は稻岡・井上が行った。
6. 掲載した図面の実測・製図・図版の作成は稻岡・井上・稻元・永友・徳丸が分担して行った。
7. 現場及び遺物写真撮影は稻岡・井上が分担して行った。
8. 本書の編集は稻岡・井上が分担して行った。

# 本文目次

第Ⅰ章 生日古墳群の概要 .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. これまでの調査 .....	1
3. 平成17年度の調査の概要 .....	2
4. 古墳番号の整理 .....	3
5. 跡江丘陵の基本層序 .....	11
第Ⅱ章 3号墳・5号墳周囲堤の調査 .....	13
1. 調査以前の環境とこれまでの調査 .....	13
2. 平成17年度の調査結果 .....	13
第Ⅲ章 14号墳の調査 .....	15
1. 調査以前の環境とこれまでの調査 .....	15
2. 平成17年度の調査結果 .....	15
第Ⅳ章 27号墳の調査 .....	21
1. 調査以前の環境 .....	21
2. 平成17年度の調査結果 .....	21
第Ⅴ章 31号墳の調査 .....	23
1. 調査以前の環境 .....	23
2. 平成17年度の調査の概要 .....	23

# 表 目 次

第1表 生日古墳群高塚古墳一覧 .....	5
第2表 生日古墳群地下式横穴墓一覧 .....	6

## 挿図目次

第1図	生日古墳群位置図	4
第2図	生日古墳群古墳配置図（1/3,600）	7・8
第3図	生日古墳群地下式横穴位置図（1/3,600）	9・10
第4図	跡江丘陵上層堆積基本層序模式図	12
第5図	17年度3号墳・5号墳間の周堤調査位置図（1/1,200）	13
第6図	3号墳・5号墳間の周堤調査区全体図（1/300）	14
第7図	17年度14号墳調査位置図（1/900）	15
第8図	14号墳調査区全体図（1/300）	17・18
第9図	14D墳丘検出状況（1/100）	19
第10図	14号墳出土遺物（1/4）	20
第11図	17年度27号墳調査位置図（1/750）	21
第12図	27号墳出土遺物（1/4）	21
第13図	27号墳調査区全体図（1/300）	22
第14図	17年度31号墳調査位置図（1/1,000）	23
第15図	31号墳調査区全体図（1/200）	24

# 第Ⅰ章 生目古墳群の概要

## 1. 調査に至る経緯

昭和18年	前方後円墳7基、円墳36基の計43基が国指定史跡を受ける。(9月8日)
昭和36～38年	上ノ追土地改良事業により、一部の古墳が削平され、形状が変化。
昭和37年	古墳標石、道標石、説明版の設置等の整備が行われる。
昭和50・51年	「生目古墳群保存管理計画策定所」、航空測量による地形図作成を行う。
昭和57年	古墳群約14haを対象とした境界点測量を実施。
平成5年	「宮崎市制70周年記念事業」の一環として(仮称)宮崎市総合スポーツ公園並びに生目史跡公園建設事業が取り上げられる。
平成5～7年度	国庫補助事業で、生目古墳群周辺遺跡発掘調査を実施。
平成8年7月	生目古墳群史跡公園整備委員会が発足、基本構想・基本計画策定にあたり、計5回の委員会を開催。
平成9年度	『生目古墳群史跡公園整備基本構想・基本計画報告書』作成。土地公有化開始。
平成10年度	国庫補助を受けて史跡整備に伴う確認調査開始。

## 2. これまでの調査

生目古墳群内における本格的な発掘調査は平成5～7年の周辺遺跡確認調査と平成10年から今日までおこなっている史跡整備に伴う確認調査があり、跡江丘陵上の歴史が解明されつつある。この他、平成8年度に宮崎大学考古学研究室によって作成された6基の前方後円墳(3・5・7・14・21・22・23号墳)とその周辺の円墳(4・8・15号墳)の詳細な墳丘測量図は古墳群の現況を把握する上で、重要な資料となったのは過言ではない。

周辺遺跡の確認調査は平成4年度に宮崎市制70周年記念事業の一つとして史跡生目古墳群保存環境整備事業がおこなわれることとなり、古墳の範囲確認、周辺域の遺構確認のため、主に墳丘周囲や墳丘周辺の平坦地に調査区を設定した。その結果を基に基本構想、基本計画の策定、整備事業の範囲を確定した。この調査では、平成5年に古墳群北側の2～5号墳周辺に調査区を設定している。2号墳周辺では24～26号墳(旧3～旧5号墳)の位置を確認し、また25号墳(旧3号墳)の周溝内で地下式横穴墓(現1号)を確認しており、初めて生目古墳群での地下式横穴墓の存在が明らかになった。3号墳周辺では西側周溝の外側の平地で時期不明の土坑墓を確認している。

平成6年度の調査には古墳群中央部の7～15号墳周辺に調査区を設定している。7号墳西側に設定した調査区では4基の地下式横穴墓(現3～6号)が直線的に並ぶ状況で確認されている。この他、地下式横穴墓は9号墳の周囲で、9号墳側に玄室を向ける2基(現7・8号)、15号墳の南東部50mの位置で1基(現9号)が確認されている。また、円形周溝墓が9号墳の南側で1基、土坑墓が13号墳東側、南側でそれぞれ1基ずつ、15号墳の南東部50mの位置で1基確認されている。

平成7年度の調査では古墳群の南側の17～19号墳周辺、22号墳周辺、丘陵南側に広がる畑地に調査区を設定している。19号墳では周溝を確認した外、西側30mの位置で円形周溝墓と40mの位置で土坑墓を確認している。22号墳では周溝内から壺形埴輪が出土している。丘陵南側の畑地は45・46号墳(旧39・40号墳)が立地する箇所である。この畑地では弥生時代の集落が確認され、現状で集落からは1段低くなる細長い畑地に設定した調査区では断面V字形を呈する弥生時代中期の環濠が確認されている。集落部分では竪穴住居、土坑墓が確認されたが、ゴボウ収穫のための機械(トレレンチャー)によって著しく破壊されており、それ以降も遺構の破壊が懸念された。そのため、平成9、10の2ヶ年でこの畑地部分の緊急調査(石ノ迫第2遺跡)

をおこなった。その調査では45・46号墳を含む円墳周溝6基（45～50号墳）、地下式横穴墓5基（10～14号）、土坑墓43基、円形周溝墓1基、竪穴住居35軒、竪穴状遺構20基、土坑33基、周溝状遺構4基、溝状遺構4条が検出された。竪穴住居を中心とする集落は中期中葉～後期後葉に営まれ、後期後葉に集落の繁栄が見られる。土坑墓群は遺構との切り合い関係から集落発達後から概ね4世紀中頃まで併まれたと考えられ、円墳群とそれに伴う地下式横穴墓（10～14号）は5世紀中葉以降の築造が考えられる。

平成9年度までに纏め上げられた基本計画書により、史跡公園としての整備範囲が決定し、それを基に同年から3ヶ年をかけて、エリア内の用地買収が行われ、合わせて平成10年度から史跡整備に伴う確認調査に着手した。この確認調査では本格的に古墳の調査が行われ、これまでに、3号墳、4号墳、5号墳、6号墳、7号墳、8号墳、10号墳、14号墳、15号墳、21号墳、22号墳、27号墳（旧13号墳）、28号墳（IH14号墳）、29号墳（報告書では未指定墳と誤認、本来の旧15号墳）33号墳（報告書では旧15号墳と誤認）、の墳丘及びその周囲に調査区を設定した。史跡整備に伴う年度単位での調査古墳は以下のとおりである。

- 平成10年度（1998年度） - 3・4・5・6・28号墳
- 平成11年度（1999年度） - 3・5・7号墳
- 平成12年度（2000年度） - 3・5・7・28号墳
- 平成13年度（2001年度） - 5・7・8号墳
- 平成14年度（2002年度） - 5・7・14・15・21号墳
- 平成15年度（2003年度） - 5・7・14号墳、8号墳西側広場と7号墳墳丘のレーダー探査
- 平成16年度（2004年度） - 5・7・8・10・22・29・33号墳、32号墳（未指定G）、9号墳周辺のレーダー探査
- 平成17年度（2005年度） - 3号墳と5号墳間の周堤、27号墳、31号墳（未指定F）、16～19号墳周辺のレーダー探査

この調査では、各古墳の規格が明らかになったことだけでなく、各古墳の時期設定をおこなうことができるようになった。3号墳は22号墳の墳丘形態の再検討により、前方後円墳集成編年の3～4期、その前後の時期に22号墳、それらに続いて14号墳（4～5期）、5号墳（5期）、7・8号墳（7期）とそれぞれ比定でき、從来、墳丘形態からなされてい研究により示された100m級の前期古墳の存在を調査結果からも検証することができた。

新しい事実として生日古墳群を再認識させたのが、地下式横穴墓の検出である。これまでに未確定のものも含め36基が確認されている。（周辺遺跡確認調査や石ノ迫第2遺跡の緊急調査においても13基の地下式横穴墓が確認された。石ノ迫第2遺跡で円墳にともなうことは判明していたが、今回の調査では、前方後円墳とも密接に絡み合うことが判明した。これまで、地下式横穴墓が伴った前方後円墳は3号墳（2、15号、D～H号地式横穴墓）、5号墳（19号地式横穴墓）、7号墳（3～6、17、18、21、24～26、A～C号地下式横穴墓）、14号墳（22号地下式横穴墓）、21号墳（20号地下式横穴墓）、22号墳（23号地下式横穴墓）がある。特に7号墳の調査では、13基の地下式横穴墓が寄生するという数の上での驚きだけでなく、埋葬主体ともなりうる18号地下式横穴墓や、堅坑上に封土を設ける21、24号地下式横穴墓など新しい事例も判明した。これら地下式横穴墓は現段階で上限を5号墳に伴う19号地下式横穴墓を5世紀前半に、下限を7号墳に伴う21、24号地下式横穴墓の6世紀前半に置く。また、3号墳（3期）、14号墳（集成4～5期）、22号墳（3～4期前半）においても地下式横穴墓が伴っており、その上限が遡る可能性もある。

### 3. 平成17年度の調査の概要

3号墳・5号墳間の周堤は周堤の形態確認、地下式横穴墓の分布状況の確認のため、調査を

おこなった。5号墳側に向く周堤の斜面は一様に近世以降の時期に削平を受けており、本来の形態を残していないことが解った。また、周堤の平坦面も同様で地山の遺存状況から本来よりも20~50cm程度削平を受けていると判断される。3号墳側に向く周堤の斜面は比較的良好な状態で原形を留めていた。周堤は無段に整形されるが、基底部付近で周溝間に幅00~00mのテラスを設けており、テラス上には厚さ30cm程度のシラス土を主体とする置き土を行なう。テラス上から周堤部本体に向けて5基の地下式横穴墓横穴墓が確認された。

14号墳は後円部が2段築成であることが判明し、平坦面、下段テラスにも石を敷く。特に東側くびれ部から後円部の1/8にかけて設けた調査区では良好な葺石、敷石の残存がみられ、隆起斜道上にも丁寧に敷かれる敷石が見られる。墳頂平坦面からは壺形埴輪列が推測され、前方部平坦面から隆起斜道、その延長上の後円部斜面にも壺形埴輪を樹立させている。西側くびれ部付近に設定した調査区でも良好な葺石が確認され、明確な基底部の直径20cm程度の根石列が確認された。

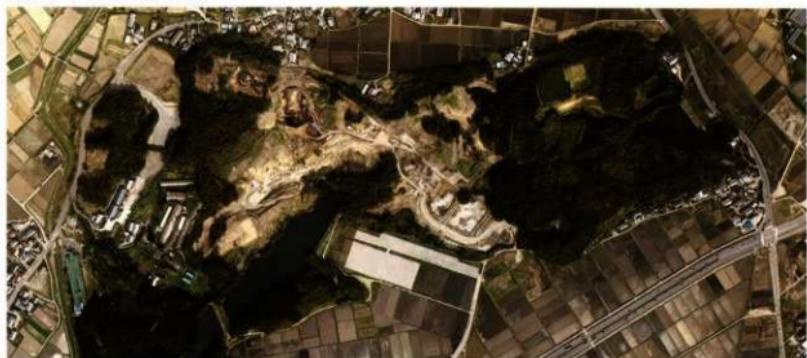
27号墳はTh-S以下で盛土整形の墳丘が確認され、墳丘周囲で周溝が確認され、高塚墳であることが判明した。周溝内からは4世紀後半と考えられる土師器片が出土した。

31号墳はTh-S以下で盛土整形の墳丘が確認され、高塚墳であることが判明した。

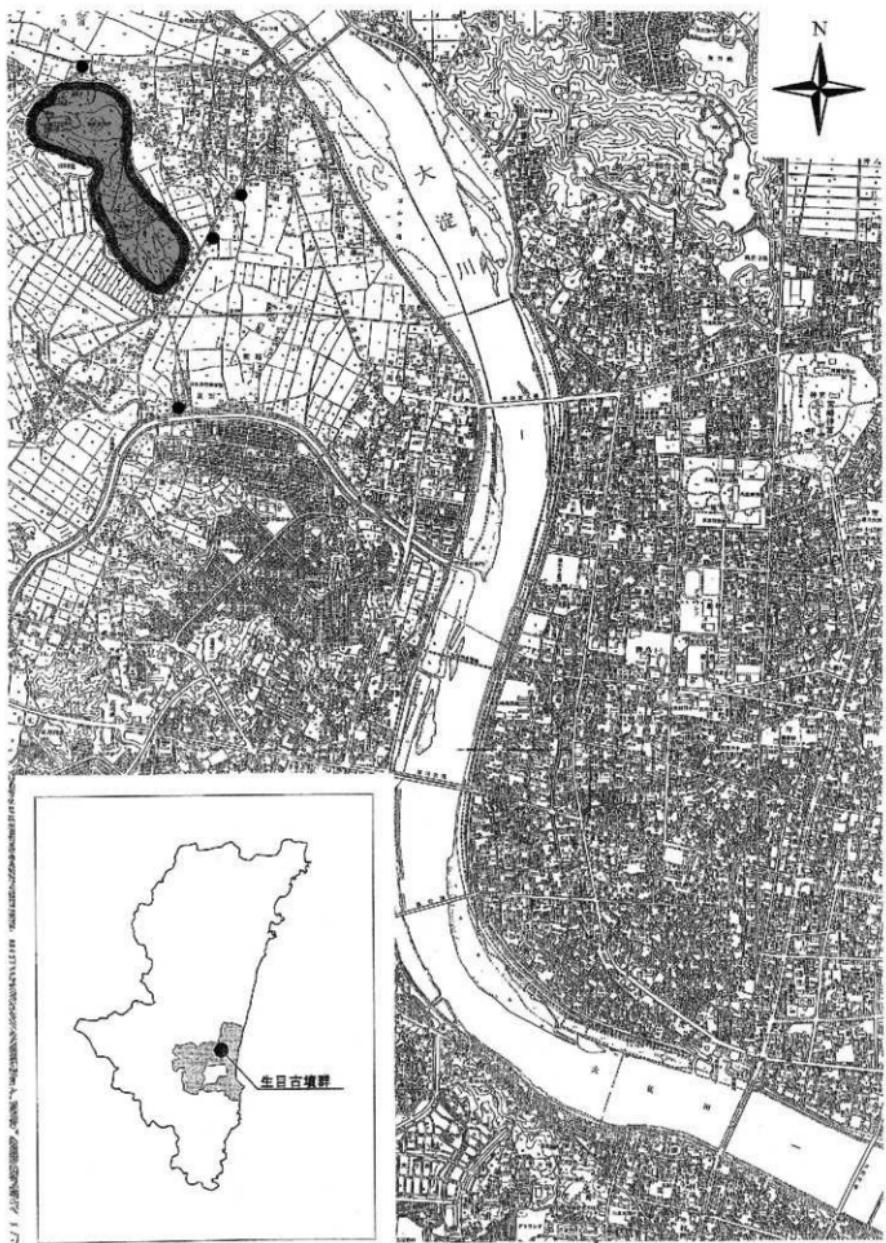
#### 4. 古墳番号の整理

昭和18年9月8日に生目古墳群は43基の高塚墳が国の史跡指定を受けている。

その後段階的におこなわれた現地踏査、確認調査等により、高塚墳の数に増減がある。旧生目村時代の昭和37年に点検をおこない現在の12号墳と15号墳が新たに確認されている。またこの際、古墳の番号が振り直され（1~23号墳、20号墳は欠番）、その際見過ごされた円墳には新番号が付されていない。平成5~7年におこなわれた生目古墳群周辺の確認調査、石ノ迫第2遺跡の確認調査、そして史跡整備に伴う確認調査で合計7基の高塚墳が新たに確認されている。今回この古墳番号の整理にあたり、現在の生目古墳群は昭和37年に付けられた新番号（1~23号墳、20号墳は欠番）は学術的に浸透しており、それらについてはそのままスライドさせ、24号墳から53号墳まで新たに名称を付した。それらを整理したものが表1の「生目古墳群高塚古墳一覧」である。なお、古墳番号を整理した中で、10号墳は確認調査で古墳でないことが解り、20号墳は昭和37年時に現在の14号墳の後円部を14号墳、14号墳の前方部を20号墳と、誤った判断をしており現在はない。これら10号墳、20号墳については将来的な混同を避けるため、それぞれを今後も欠番とする。本概報での名称、指定申請の添付図面の表記は今回整理した番号表をもとに報告する。



図版1 生目古墳群（平成17年撮影）



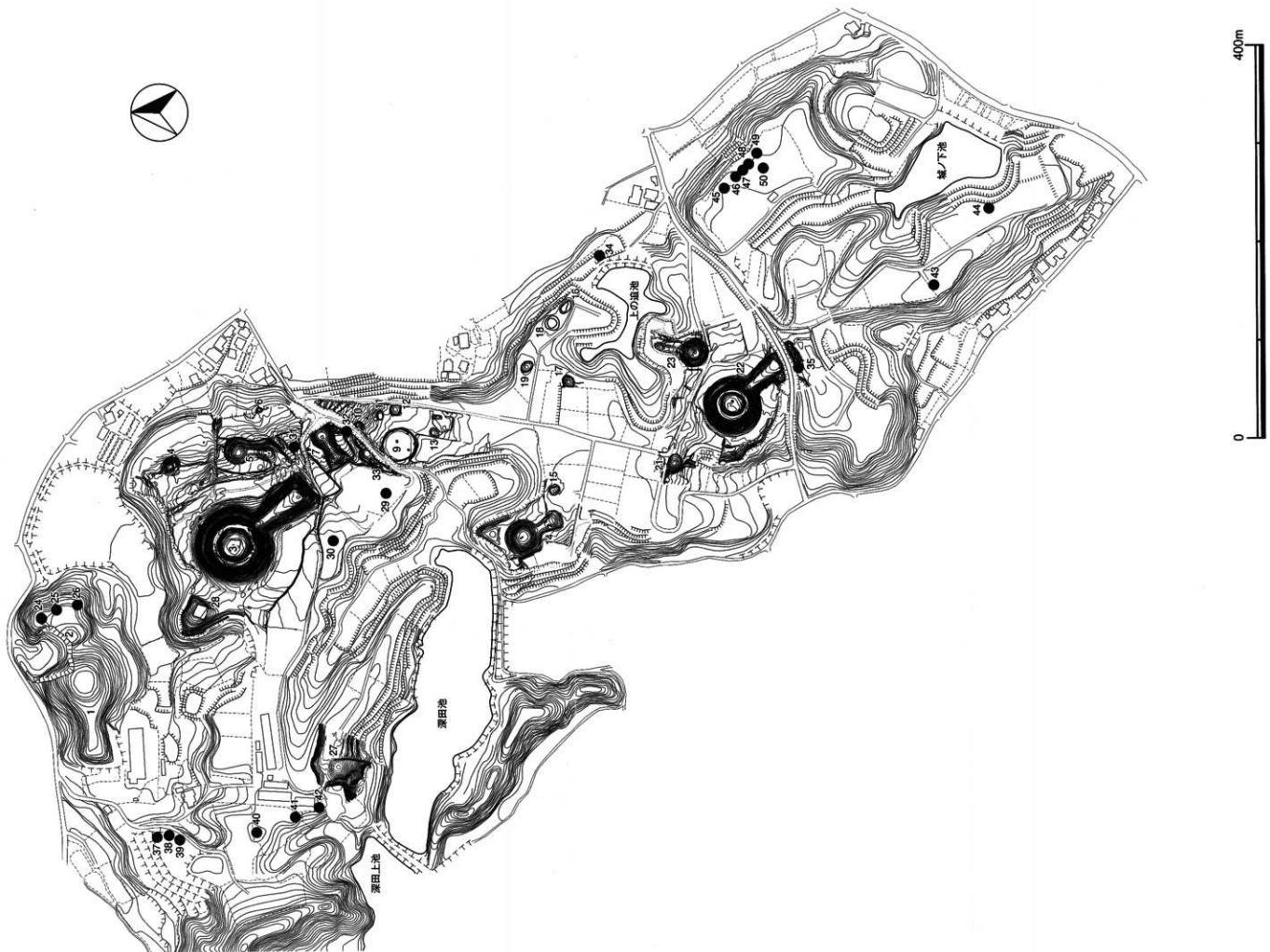
第1図 生目古墳群位置図

第1表 生目古墳群高塚古墳一覧

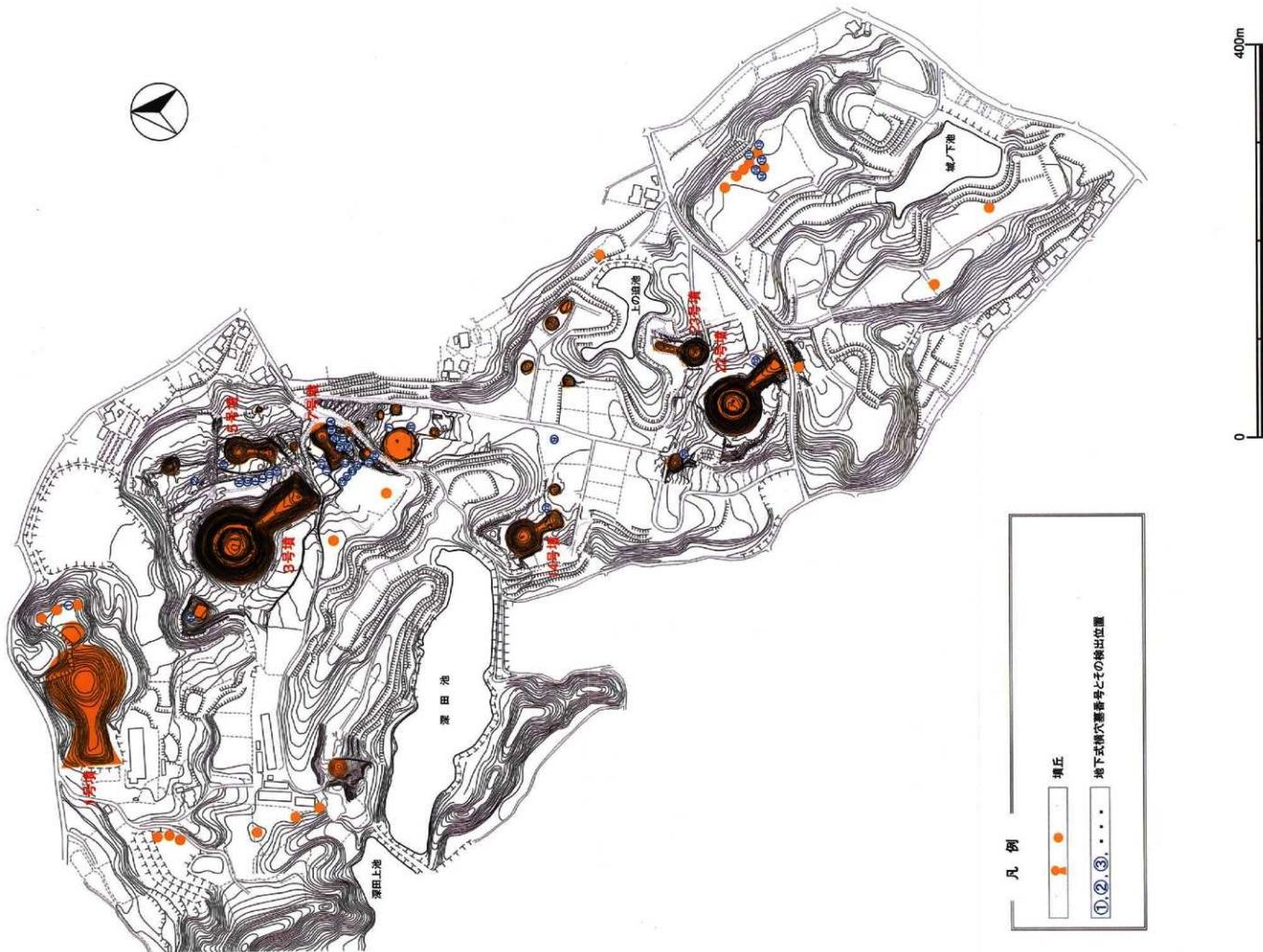
基 数	指定時 番号	昭和 38年時 番号	確認 調査時 番号	新番号 (平成 18年)	墳形	指定 (平成 18年)	備 考
1	6	1	1	1	前方後円墳	既指定	
2	5	2	2	2	円墳	ク	
3	17	3	3	3	前方後円墳	ク	
4	18	4	4	4	円墳	ク	
5	19	5	5	5	前方後円墳	ク	
6	20	6	6	6	円墳	ク	
7	21	7	7	7	前方後円墳	ク	
8	22	8	8	8	円墳	ク	
9	25	9	9	9	円墳	ク	
	23	10	10	10	古墳ではない	ク	
10	24	11	11	11	円墳	ク	
11		12	12	12	円墳	新指定	昭和37年度確認
12	26	13	13	13	円墳	既指定	
13	27	14	14	14	前方後円墳	ク	
14		15	15	15	円墳	新指定	昭和37年度確認
15	30	16	16	16	円墳	既指定	
16	32	17	17	17	円墳	ク	
17	29	18	18	18	円墳	ク	
18	28	19	19	19	円墳	ク	
20号墳は欠番							
19	35	21	21	21	円墳	ク	
20	34	22	22	22	前方後円墳	ク	
21	33	23	23	23	前方後円墳	ク	
22	2	旧2号	24	円墳	ク		
23	3	旧3号	25	円墳	ク		
24	4	旧4号	26	円墳	ク		
25	13	旧13号	27	円墳	ク		
26	14	旧14号	28	円墳	ク		
27	15	未指定E	29	円墳	ク		
28	16	旧16号	30	円墳	ク		
29		未指定F	31	円墳	新指定	平成17年度確認（5号墳・7号墳間）	
30		未指定G	32	円墳	ク	平成16年度確認（7号墳後円部南）	
31		旧15号	33	円墳	ク	平成14年度確認（9号墳・新29号墳間）・概報VI で旧15号墳と誤認・誤表記	
32	31		34	円墳	既指定		
33	36		35	円墳	ク		
34	1		36	円墳	ク		
35	7		37	円墳	ク		
36	8		38	円墳	ク		
37	9		39	円墳	ク		
38	10		40	円墳	ク		
39	11		41	円墳	ク		
40	12		42	円墳	ク		
41	37		43	円墳	ク		
42	38		44	円墳	ク		
43	39		45	円墳	ク		
44	40		46	円墳	ク		
45		未指定A	47	円墳	未指定	平成10年度確認（石ノ迫第2遺跡）	
46		未指定B	48	円墳	ク	平成10年度確認（石ノ迫第2遺跡）	
47		未指定C	49	円墳	ク	平成10年度確認（石ノ迫第2遺跡）	
48		未指定D	50	円墳	ク	平成10年度確認（石ノ迫第2遺跡）	
49	41	旧41号	51	円墳	既指定	平成10年度確認（石ノ迫第2遺跡）	
50	42	旧42号	52	円墳	ク		
51	43		53	円墳	ク		

第2表 生目古墳群地下式横穴墓一覧

基 数	番号	全長	玄室				時期	出土遺物	構築位置	調査内容
			奥行	幅	高	面積				
1	1	—	—	—	—	—		—	2号墳周辺	竪坑確認
2	2	13	0.4	1.5	0.3	0.6			3号墳外堤	完掘
3	3	—	—	—	—	—		鉄斧	7号墳周辺	竪坑確認
4	4	—	—	—	—	—		—	7号墳周辺	竪坑確認
5	5	—	—	—	—	—		—	7号墳周辺	竪坑確認
6	6	—	—	—	—	—		—	7号墳周辺	竪坑確認
7	7	1.1	0.6	2	0.45	1.2		鉄鎌、ヤリガンナ	9号墳周辺	完掘
8	8	1.6	0.9	1.8	0.45	1.6	5c中葉	鉄鎌、刀子、鉄斧、鉄鎌	9号墳周辺	完掘
9	9	—	—	—	—	—		—	15号墳南東約50m	竪坑確認
10	10	1.8	0.8	2.1	0.5	1.7			未指定A号墳周辺	完掘
11	11	1.3	0.4	1.75	0.4	0.7	6c後葉?		未指定A号墳周溝内	完掘
12	12	1.9	0.9	2.1	0.85	1.9			未指定B号墳周溝内	完掘
13	13	2.5	1.2	1.95	0.7	2.3	6c中葉?鉄鎌	未指定B号墳周溝内	完掘	
14	14	1.4	0.4	1.72	0.45	0.7	6c後葉?未指定D号墳周溝内	未指定		
15	15	1.9	0.8	2.3	0.7	1.8		鉄鎌	3号墳周溝内	完掘
16	16	—	—	—	—	—		—	旧14号周溝内	半載
17	17	—	—	—	—	—		刀子	7号墳周溝内	玄室半截
18	18	—	—	—	—	—	5c前葉	—	7号墳周溝内	調査中
19	19	1.95	0.7	1.95	0.6	1.4	5c前葉	鉄鎌、竪坑より高坏	5号墳周溝外側	完掘
20	20	—	—	—	—	—			21号墳周溝内	調査中
21	21	—	—	—	—	—	6c初頭	封土上より土師器出土	7号墳周溝内	封土検出
22	22	—	—	—	—	—			14号墳周溝内	調査中
23	23	—	—	—	—	—			22号墳周溝内	平面検出
24	24	—	—	—	—	—	6c初頭	封土上より土師器出土	7号墳周溝内	封土検出
25	25	—	—	—	—	—			7号墳周溝内	平面検出
26	26	—	—	—	—	—			7号墳周溝内	平面検出
27	27	—	—	—	—	—			8号墳周溝内	封土検出
28	28	—	—	—	—	—			8号墳周溝内	封土検出
29	A	—	—	—	—	—			7号墳周溝内	封土確認?
30	B	—	—	—	—	—			7号墳周溝内	竪坑検出?
31	C	—	—	—	—	—			7号墳周溝内	竪坑検出?
32	D	—	—	—	—	—			3号墳東側周堤斜面	封土検出
33	E	—	—	—	—	—			4号墳東側周堤斜面	封土検出
34	F	—	—	—	—	—			5号墳東側周堤斜面	封土検出
35	G	—	—	—	—	—			6号墳東側周堤斜面	封土検出
36	H	—	—	—	—	—			7号墳東側周堤斜面	封土検出



第2図 生目古墳群主要部分古墳配置図 (1/3,600)



第3図 生目古墳群地下式洞穴位置図 (1/3,600)

## 5. 跡江丘陵の基本層序

生目古墳群を形成する跡江丘陵は地元では「シラス」と呼ばれる24,000～25,000年前鹿児島県の姶良カルデラより噴出したテフラ「姶良入戸火碎流堆積物」(以下、シラス)が堆積し、それを基盤層とする独立丘陵である。その後、6,300～6,500年前のアカホヤ火山灰(以下、K-Ah)、10～13世紀の霧島大谷第5テフラ「霧島高原スコリア」(以下、Th-S)と大淀川下流域で発掘調査をする上で鍵層となるテフラがこの跡江丘陵上でも確認される。以下に示した基本層序は古墳群内における全般的な層序であり、丘陵上すべてを網羅するものではなく、特に、VI層までは近年の耕作により削平されている部分が多い。

I層：表土。

II層：黒褐色土(0～50cm)

旧耕作土を主体とする層。場所によっては桜島第3テフラ(1471年 通称「文明ボラ」)、霧島新燃享保軽石(1717年)を認めることができる。本土壤を埋土とする擾乱土によって墳丘墳端部、周溝外縁の立上りを削平されている場所が多い。近世以降の遺物を包含する。

III層：黒色土(0～30cm)

黒ボク土にTh-Sを含んだ層である。Th-S自身が密集して層をなす場合もある。Th-Sは古墳群内の安定した平場では削平を受けていない限り、必ず堆積しており、墳丘平坦面、周溝内でも比較的容易に認められる。当古墳群で発掘調査をする上で、一番重要な層であり、本層以下からは慎重な掘下げ作業を行わなければならない。また、概報<sup>2</sup>で報告した10号墳や22号墳前方部では本層以上で盛土をおこなっていたため、墳丘盛土ではないということが判明し、それとは逆に本概報内で報告する27号墳、31号墳は本層以下で盛土が確認されたため、墳丘として認定することができる。なお、中世期における造構の埋土内にも本土壤が混入しており、その時期を判定する上でも重要なものとなるが、造構そのものは古墳を破壊していることが多い。

IV層：黒色土(0～30cm)

墳丘構築後の黒ボク土の自然堆積層である。本丘陵上では、黒ボク土の堆積途中の段階で古墳の構築が行われているため、本来は次のV層と同一堆積層なのかもしれないが、古墳の整形、覆土、周溝埋土を検討するに当たっては異なる層として取り扱わなければならない。そのため古墳構築の影響のない平坦面には存在しない。V層とは基本的に違いがみられないが、周溝内に堆積する本層は周溝壁面、底面の地山となるVI～VII層が混合されるためか、V層よりも僅かに砂質を帯びる傾向がある。さらに、下位の周溝底面に近くなるとさらにその影響が強くなり褐色層(IVb層)を認めることができる。墳丘から流れ込んだ遺物を包含する。

V層：黒色土(0～30cm)

古墳構築面となる黒ボク土の自然堆積層である。先述したとおり、IV層と基本的に違いがなく、互いが直接重なった際は非常に難しい調査となる。基本的に墳丘では本層以下を地山整形、これより上が盛土整形となる。また、弥生時代中期後半から終末期における集落の文化層も含まれており、この層以下で相当期の造構遺物が確認されることが多い。

VI層：アカホヤ土(0～30cm)

K-Ahの堆積層。橙色、黄褐色であり、丘陵全体に広がる。無遺物層である。本層と次のV層付近が墳丘基底部となることがほとんどである。また、14号墳周辺では、本層の風性層が堆積しており、他と比べしまりがなく、色が淡い。

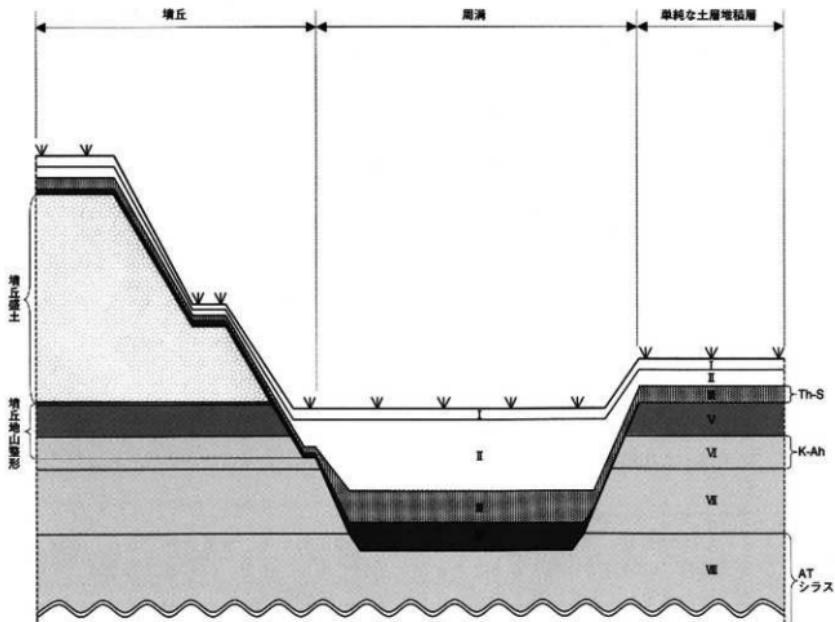
VII層：暗褐色土(80cm前後)

ローム層である。さらに、2層に分けることができ、上位は硬くしまるが粘性が無く塊

れやすいが、下位は上位に比べしまりがあり粘性を帯びる。墳丘基底部付近から、周溝底面に認められる。古墳群内の地下式横穴墓は本層内で玄室天井を納める。縄文時代早期の跡江貝塚の文化層でもあり、その時期に相当する土器、焼石が確認されるが多い。下位の層では、霧島小林軽石（14,000～16,000年前）が認められることがある。

Ⅳ層：シラス（500cm以上）

跡江丘陵の基盤層であり、場所、高さの違いで、橙色、白色、桃色のものがみられる。無遺物層である。周溝を深く設ける3号墳、7号墳、22号墳では底面がシラス層に達するものがあり、7号墳で見られた地下式横穴墓の竪坑上の封土の主体もこのシラスであり、玄室がその層まで達していることが窺える。なお、このシラスと同様の姶良カルデラより噴出したテフラである姶良丹沢火山灰（AT）も、場所によっては確認されているが、今回は同層として扱う。



第4図 跡江丘陵土層堆積基本層序模式図

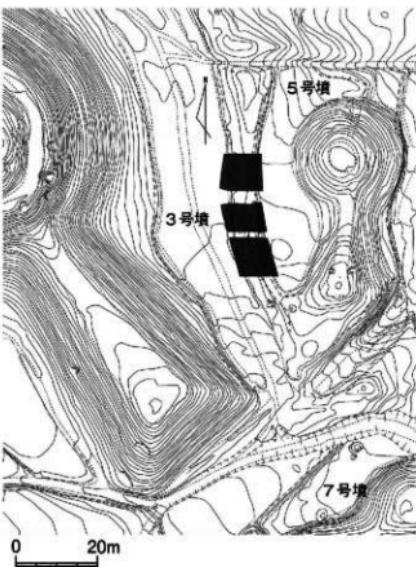
## 第Ⅱ章 3号墳・5号墳間周堤の調査

### 1. 調査以前の環境とこれまでの調査

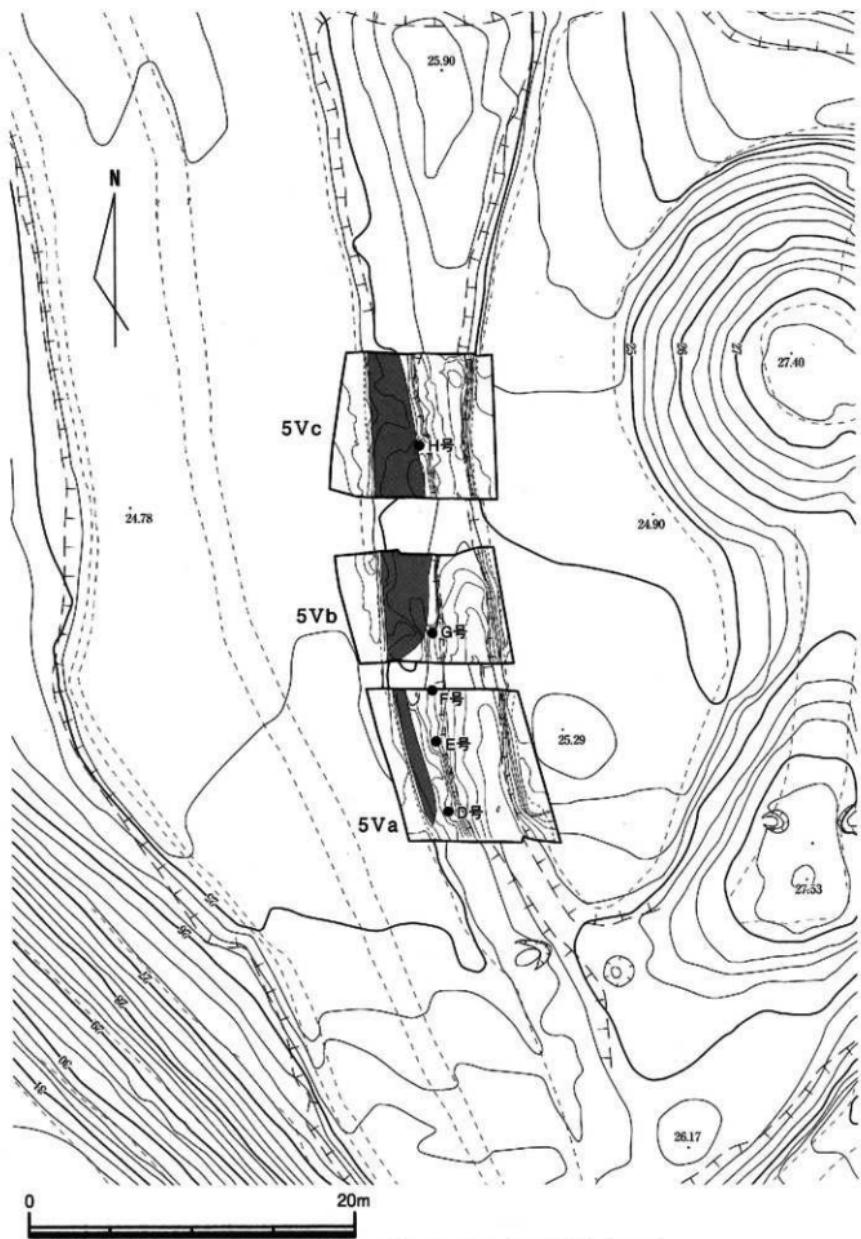
3号墳の墳丘東側には幅広の周堤が見られ、最大で22.9mの幅がある。今回調査対象とした5号墳との間でも6.7m～16.0m程あり、高さは最大で1.3mをはかる。3号墳は墳形より4世紀中葉、5号墳はこれまでの調査により5世紀前半に構築された前方後円墳と考えられ、本来は3号墳構築に設けられたものと考えられる。過去この周堤では平成10年度に3号墳北東部の4号墳に近い位置で2箇所（3N、3O）、平成12年度3号墳南西部で1箇所（5IVb）で確認調査をおこなっており、2基の地下式横穴墓（2号、15号）が確認されている。調査地周辺はスダジイ、マテバシイの混合林となっている。

### 2. 平成17年度の調査結果

調査は周堤の形態確認のための調査を面向ておこなった。調査区は南側より5Va、5Vb、5Vcとした。各調査区ともに概ね調査結果は同様の状況であった。5号墳側に向く周堤の斜面は一様に近世以降の時期に削平を受けており、本来の形態を残していない。また、周堤上の平坦面も同様で地山の遺存状況から本来よりも20～50cm程度削平を受けていると判断される。3号墳側に向く周堤面は比較的良好な状態で原形を留めていた。周堤は無段に整形されるが、基底部付近で周溝間に幅1.5～4.5mのテラスを設けており、このテラスは北側ではそのまま調査区外に続くが、南側は5Vaの調査区内で収束している。テラス状には厚さ30cm程度のシラス土を主体とする置土を行い整形している。地山上にシラスの置土が直接施されているため、周堤構築時本米の施設であると判断できるが、その性格は現状では不明である。また、そのテラス上から周堤部本体に向けて地下式横穴墓の構築が確認された。5Vaで3基（南側よりD号、E号、F号）、5Vbで1基（G号）、5Vcで1基（H号）の合計5基を数え、いずれも検出状態で留めている。D号、E号では堅坑上に極低い封土を有している。これらの詳細は不明であるが、今回の調査区の南側にあたる平成12年度調査の5IVb区でも、周堤斜面を利用した15号地下式横穴墓が確認されており、その形態から判断すると、今回検出された地下式横穴墓も周堤の隆起を利用して、内部に平入構造の玄室を構築すると推測される。なお、15号地下式横穴墓は出土した刀子より、5世紀代の構築が推測される。このように3号墳と5号墳間の周堤上には群として地下式横穴墓を構築していることが明らかとなった。今後、この地下式横穴墓群が3号墳もしくは5号墳に意図的に寄生するものか、もしくは、単純にその地形を利用したがために、寄生するような状態になってしまのか、これを解明すべくさらに調査していく必要があり、生目古墳群における前方後円墳と地下式横穴墓の関係を検討する上でも重要な事項となる。



第5図 17年度3号墳・5号墳間の周堤調査位置図  
(1/1,200)



第6図 3号墳・5号墳間の周堤調査区全体図 (1/300)

## 第III章 14号墳の調査

### 1. 調査以前の環境とこれまでの調査

古墳群中央部に位置する前方後円墳で、後円部の高さに比べ、低平な前方部が特徴的である。東側、北側、西側は谷に閉まれており、西側は沖積地に向かって開けており、丘陵外からも14号墳を望むことができる。

墳丘上には現在カラカシ、マテバシイ、スギなどが見られる。発掘は平成13~15年度に行われた。

#### 【調査箇所】

墳丘主軸ラインの後円部背面墳端から周溝外縁推定位置にかけて（14 a）

後円部北東側から周溝外縁及びその外側にかけて（14 b）

墳丘主軸ラインに後円部中心で直交する東側墳端から周溝外縁にかけて（14 c）

くびれ部東側付近の前方部及び一部周溝外縁推定位置にかけて（14 d）

墳丘主軸ラインに前方部中心で直交する東側墳端から一部周溝外縁推定位置にかけて（14 e）

墳丘主軸ラインの前方部前面から墳端外側の延長上（14 f）

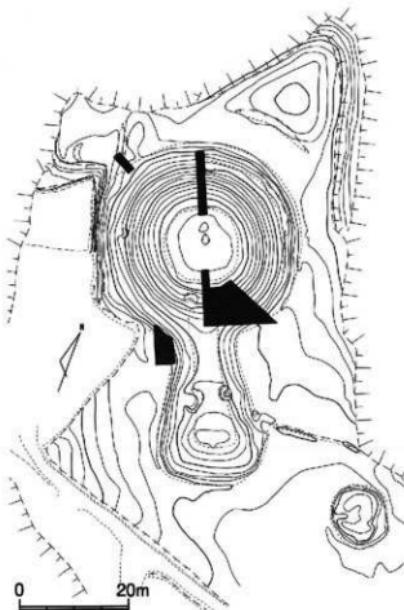
#### 【調査の結果】

調査結果より墳長が63.2mと判明している。前方部の段築が2段であることを確認し、斜面の葺石だけでなく、平坦面でも敷石が確認された。また14 d の2段目平坦面において壺形埴輪が主軸ライン並行で3個体等間隔に樹立されていたことが確認された。墳端は後円部・前方部の調査区すべてで根石列により確認できる。後円部周囲では明確に確認され、くびれ部から前方部側面ではやや曖昧となり、前方部隅角に向かって収束する状況がみられるが、隅角と前方部前面は地山が搅乱され不明である。また14 e 調査区では周溝内に地下式横穴墓（22号）を確認している。これは周溝の外側の立ち上がりを利用して構築されたもので、このタイプの地下式横穴墓は生目3・7・22号墳で確認されている。

### 2. 平成17年度の調査結果

#### 14 a

14年度に墳端確認のため設定した調査区を、後円部の段築確認のため墳頂部肩口付近まで拡張した。調査の結果、後円部は2段築成であることが確認された。1段目の高さは1.7m、2段目は2.6mを測る。1段目中位付近までが地山整形（基本層序V・VI層）、それより上位が盛土構築となる。1段目テラスから墳頂平坦面にかけては良好な状態で葺石・敷石が確認され、墳頂平坦面は2~5cm程度の小礫、2段目斜面は10~15cm程度の礫、1段目テラス面は5cm程度の礫が敷かれており、部所によって葺石の大きさに違いが見られた。また、墳頂平坦面からは壺形埴輪片が出土している。



第7図 17年度14号墳調査位置図 (1/900)

#### 14d

後円部と前方部の接続の状況、及び後円部墳丘形態の確認のため、15年度の調査でくびれ部に設定した14dを主軸方向に後円部墳頂付近までと後円部中心から主軸ラインより45°南東方向に拡張し、後円部の1/8を調査区として再設定した。

調査の結果、前方部と後円部の接続の状況が明らかになった。後円部の1段目テラスと前方部の1段目テラスはそのまま接続し、前方部の2段目平坦面は後円部に向けて緩やかに上っていっており、明確な傾斜変換もなく、そのまま後円部斜面となる様な状況である。あえて、後円部斜面と前方部からのスロープに境界を置くならば、前方部2段目平坦面の肩口に配する直径40~60cm程度の大きめの礫が途切れる箇所となる。また、墳丘全面で非常に良好な状態で葺石・敷石が確認され、墳丘全体を礫が覆っていることが解った。平坦面の肩口や墳裾には大きめの礫を配置するものの、区画については通常と手法が異なる。区画は明確に認めることができるもの、区画列石と呼べるものは殆どなく、一定範囲ごとに礫の大きさ揃えそれを一区画としている。特に平坦面の敷石では顯著にみられ、小さいものでは後円部の墳頂平坦面付近で2~5cm程度の玉砂利状の区画や、大きいものは20cm程度の礫の区画がある。要所でその手法が見られ、くびれ部付近では特に顯著にみられる。

本調査区では平成14年度調査で、前方部2段目平坦面から3個体の壺形埴輪の樹立が確認されており、今回の調査では後円部に向けて、その延長の埴輪列が確認された。列は14年度のものも含め、合計9個体を数える。80~100cmの間隔で樹立し、前方部2段目平坦面から後円部に向けてのスロープ上に留まらず、その延長上の後円部2段目斜面にまで認められる。いずれの設置箇所において樹立のための明確な掘方は認められず、若干の壅み程度しかない。また、後円部1段目テラスにも壺形埴輪片が150cm程度の間隔をおいて3箇所集中して出土しているが、1個体以外は底部が見られず、後円部墳頂平坦面からの転落とも考えられ、テラスでの壺形埴輪の樹立の判断は慎重を期さなければならない。

#### 14h

墳丘形態・墳端確認のため、西側くびれ部に面的に調査区を設定した。結果、明確なくびれ部が確認され、前方部、後円部互いに、良好な状態で根石列が確認された。葺石も非常残存が多い。遺物は出土していない。

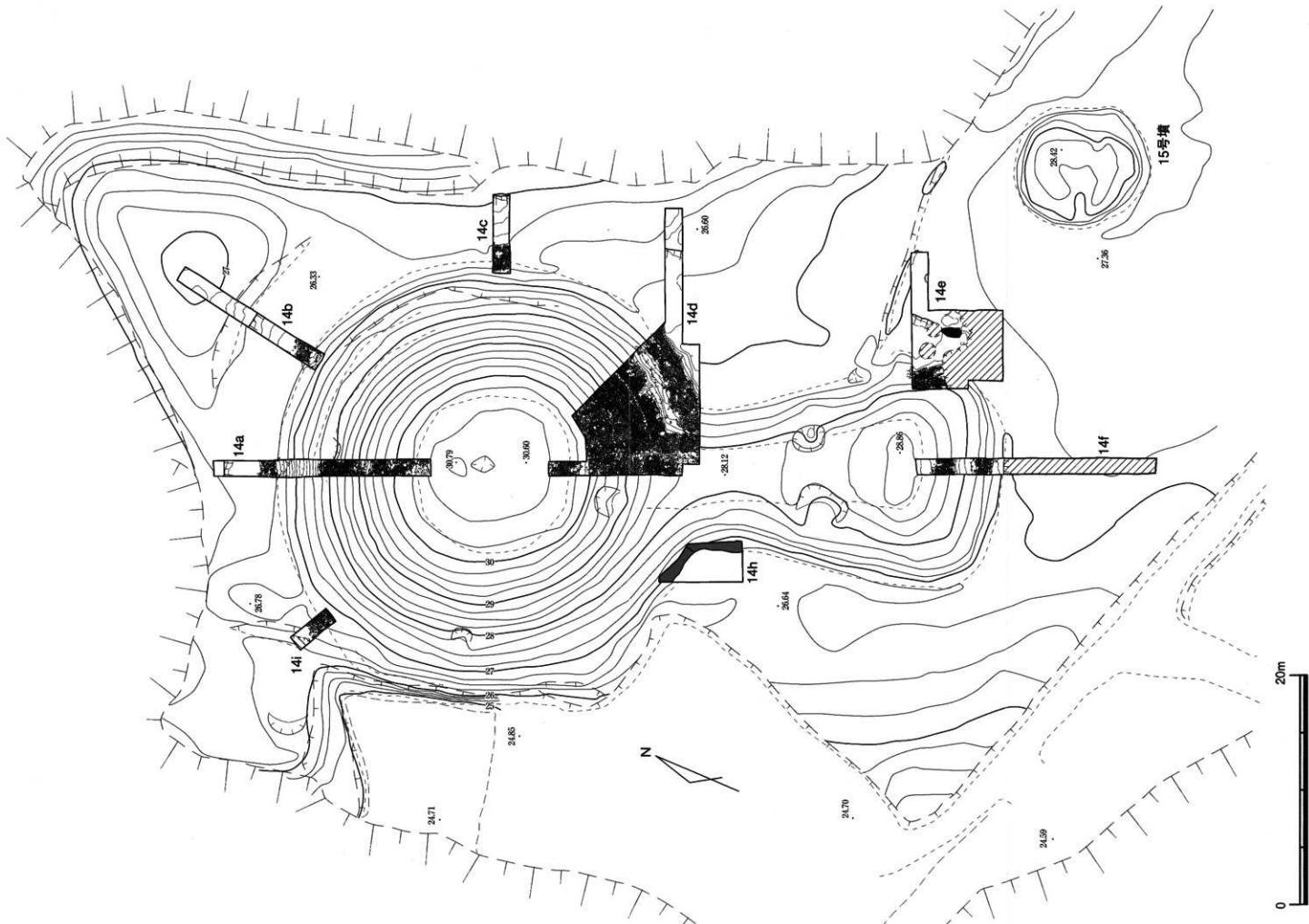
#### 14i

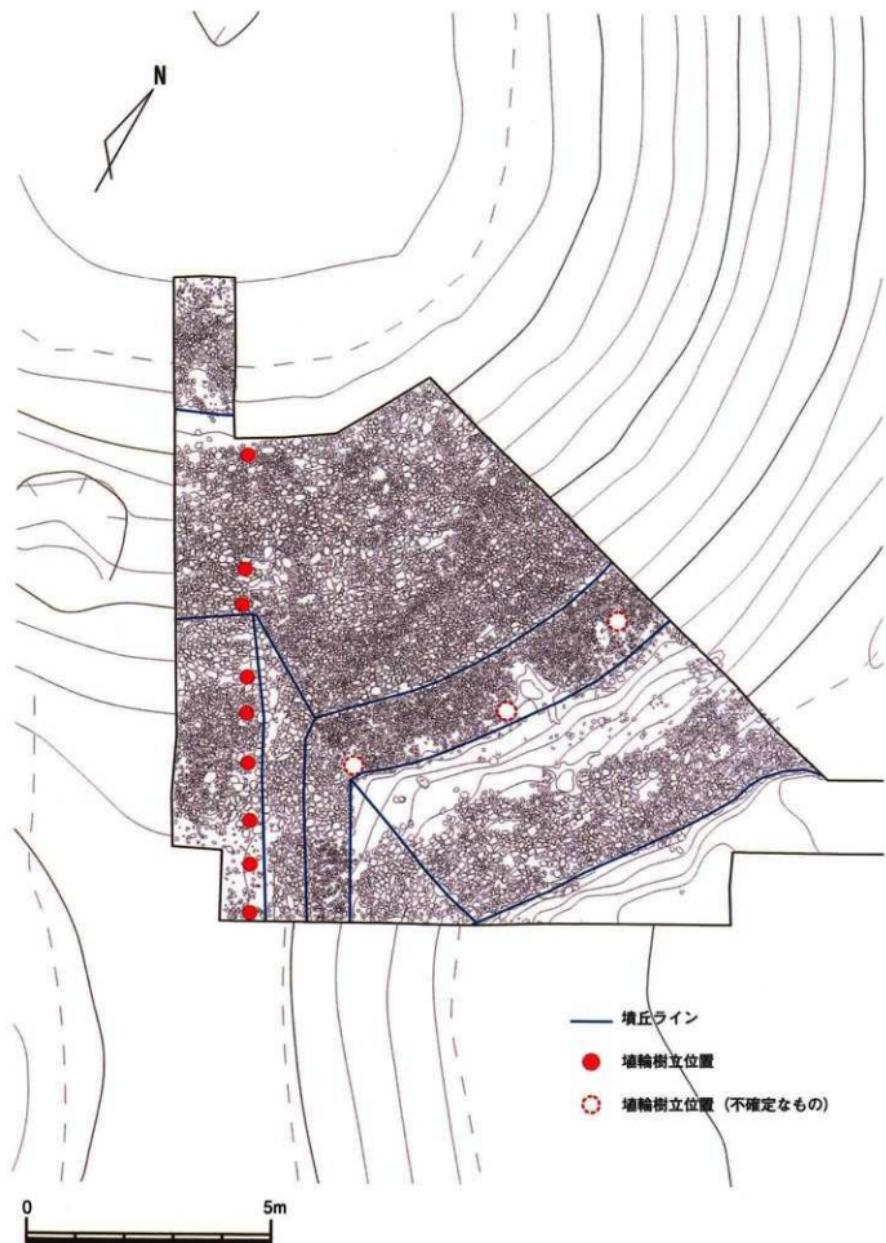
後円部の墳端及び周溝確認のため、後円部西側、北西方向に調査区を設定した。他の調査区同様、良好な状態で葺石が確認され、端部では30cm程度の円礫が根石列を成していた。調査区北西端は搅乱を受け、周溝は確認できなかった。遺物は出土していない。

#### 出土遺物（第10図）

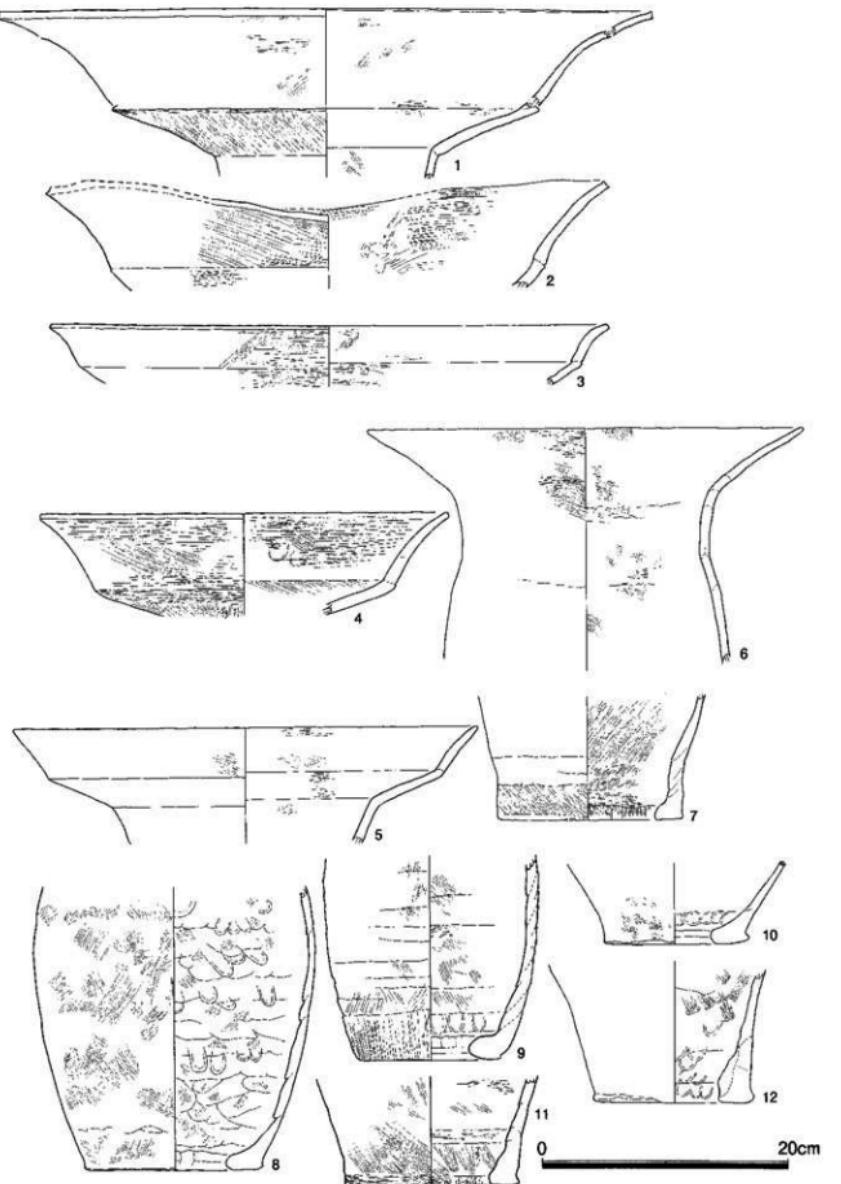
今回の出土遺物は全て壺形埴輪である。それぞれが比較的纏まった状態で出土した割には、全形を判断できる資料がなく、器高等が判断できない。全体に作りが粗く、粘土の継ぎ目が多く残る。胎土も直径1~6mm程度の小礫を多く含み、調整痕の摩滅が著しい。1~5は複合口縁を呈する。個体によって多少は異なるが、第一口縁と第二口縁間に明確に有段部が見られる。6と7は同一個体であるが接点がない。6は今回掲載した資料で唯一の単口縁となるが、全体にみても単口縁のものは殆どない。胸部から頸部状に括れ、口縁部は大きく開く。在地の壺形土器にはこういった器形のものは見られず、転用ではないと考えられる。7~12は胸部から底部にかけての資料である。胸部は膨らみを持たず、スマートな器形になると考えられる。底部はすべてが、焼成前に積上げており、端部付近は一様に内面を肥厚させ、平底を意識する。特に8、9は内面側がL字になる。こういった底部の整形は生目5号墳出土の埴輪でも見られるが、5号墳のものはさらにスマートな胸部を呈しており、複合口縁の有段部は14号墳に比べ緩い。さらに5号墳では円筒埴輪をモチーフにしたとみられる筒型の埴輪も確認されており、部位の属性、器種構成から判断して、14号墳は5号墳に先行すると考えられる。

第8図 14号坑開拓区全図 (1/300)





第9図 14D墓丘検出状況 (1/100)



第10図 14号墳出土遺物 (1/4)

## 第IV章 27号墳の調査

### 1. 調査以前の環境

27号墳（昭和18年史跡指定時13号墳）は3号墳から200m西側の別尾根の根元に位置し、南側には灌漑用ため池の深田池を見下ろす。墳丘上及び周辺には現在スダジイ、クスノキ、カラカシ、クヌギなどが見られ、以前は墳丘東側の尾根上平坦面、南東側斜面は尾根先に向かってミカン畑として利用されていた。その影響により墳丘東側は南北方向に大きく削平を受けている。この27号墳は円墳の指定を受けるが、深田池へと下る南側斜面の傾斜は27号墳墳頂から始まっており、現状での南側の墳端を見極めは難しく、また西側でも南北に大きく削平されているため墳丘でない可能性も考えられた。

調査は墳丘であるか否かの判断を確認するためにおこなった。

### 2. 平成17年度の調査結果

#### 27a

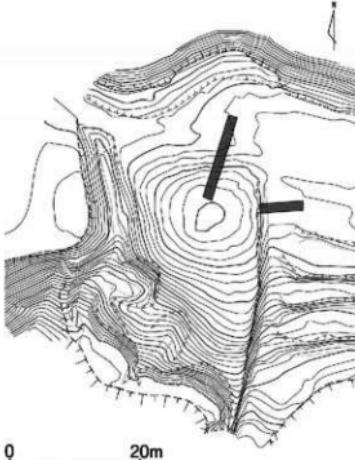
墳丘北側方向に巾1.5m、長さ13.2mの調査区を設定した。その結果、墳丘部分では基本層序V層（Th-Sを含む黒ボク土）下位で盛土が確認され、現状墳丘外の平坦面の調査区北端では巾3.3m、深さ50cmを測る周溝が確認された。周溝床面では土師器片が出土した。墳丘は無段築で、葺石は見られず、基本層序V層（黒色層）及び、VI層（アカホヤ層）までを地山削りだし、V層（黒色層）の上位に墳丘盛土を構築する状況がみられる。墳丘の高さは1.9mを測る。

#### 27b

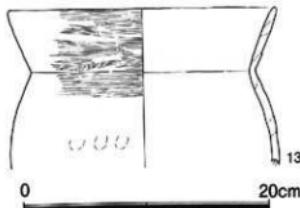
墳丘形態、ならびに墳端、周溝確認のため東側に巾1.5m、長さ6.6mの調査区を設定した。調査の結果、墳端と周溝が確認された。現状ではミカン畑による削平受けているものの墳端まで削平されておらず良好な状態で検出された。27aと同じくアカホヤ、黒色層の地山削りだしと見られる。今回周溝は全掘せず、調査区南側壁沿いに巾15cmでサブトレンチを設け周溝床面まで掘り下げる。結果、周溝は巾3.0m、深さ55cmをはかる。

出土遺物（第12図）13は27a調査区周溝内底面付近で出土した土師器の甕片である。口縁部径と胴部径がほぼ同じになり、器壁は比較的薄いが、在地系の甕である。外面調整には縦方向の工具によるハケののちヨコナデが入る。

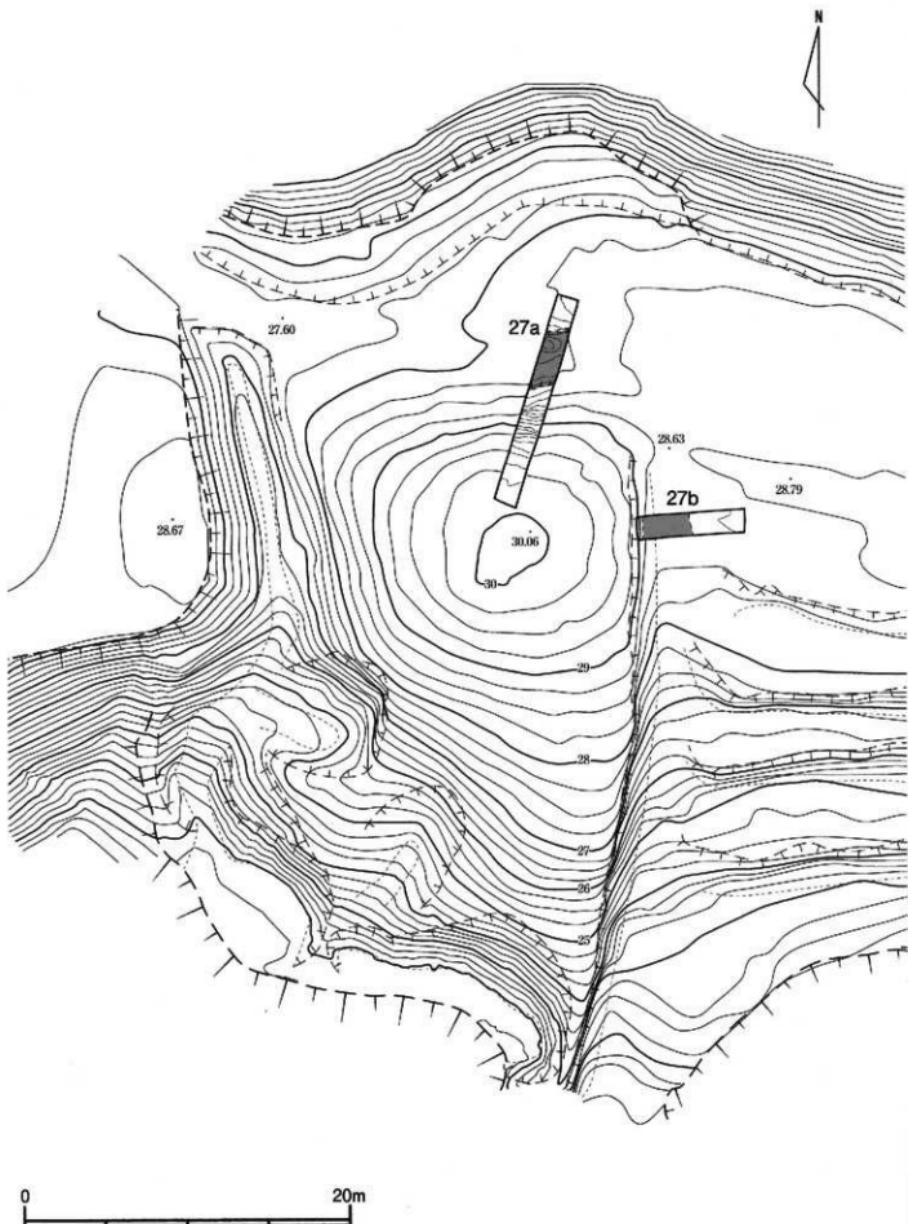
27号墳は墳丘であることが確認されたが、今回検出された周溝の巡る位置より、単純な円墳ではなく、造り出し付円墳もしくは古墳群内では唯一の方墳である可能性が考えられ、墳形の断定を行なうには、さらに形態確認のための調査を行なう必要がある。今回、出土した遺物は1点であったため築造年代推定には慎重を期すところではあるが、概ね5世紀前半代であろう。



第11図 17年度27号墳調査位置図 (1/750)



第12図 27号墳出土遺物 (1/4)



第13図 27号墳調査区全体図 (1/300)

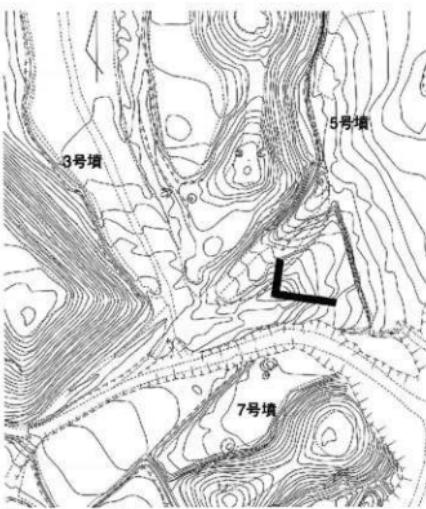
## 第V章 31号墳の調査

### 1. 調査以前の環境

31号墳は前方後円墳である5号墳と7号墳の中間地点に位置する高さ約1.2mの円丘状の高まりであった。5号墳と円丘間には作業道、円丘と7号墳間には里道が走っており、それらの影響によって、平面は三角形に近い形を呈する。

生目古墳群では国史跡指定以前の昭和初期の時代に古墳群の立地する丘陵を掘削状に掘削し、その底地に農道を整備するという大規模な工事が行なわれ、その際に产出された廃土を道の両側に丘状に築き、それが後に墳丘（10号墳、22号墳前方部）として認定されたという経緯がある（宮崎市教委2007）。当円丘南側の里道もその当時に造られた農道であるため、当地も同様に廃土の山である可能性が考えられた。そのため調査は、墳丘であるか否かの判断のために行った。ちなみに昭和18年の国史跡指定時に当地は墳丘として認定されていない。

調査以前の31号墳上はマテバシイ、イチイガシがみられる林になっていた。



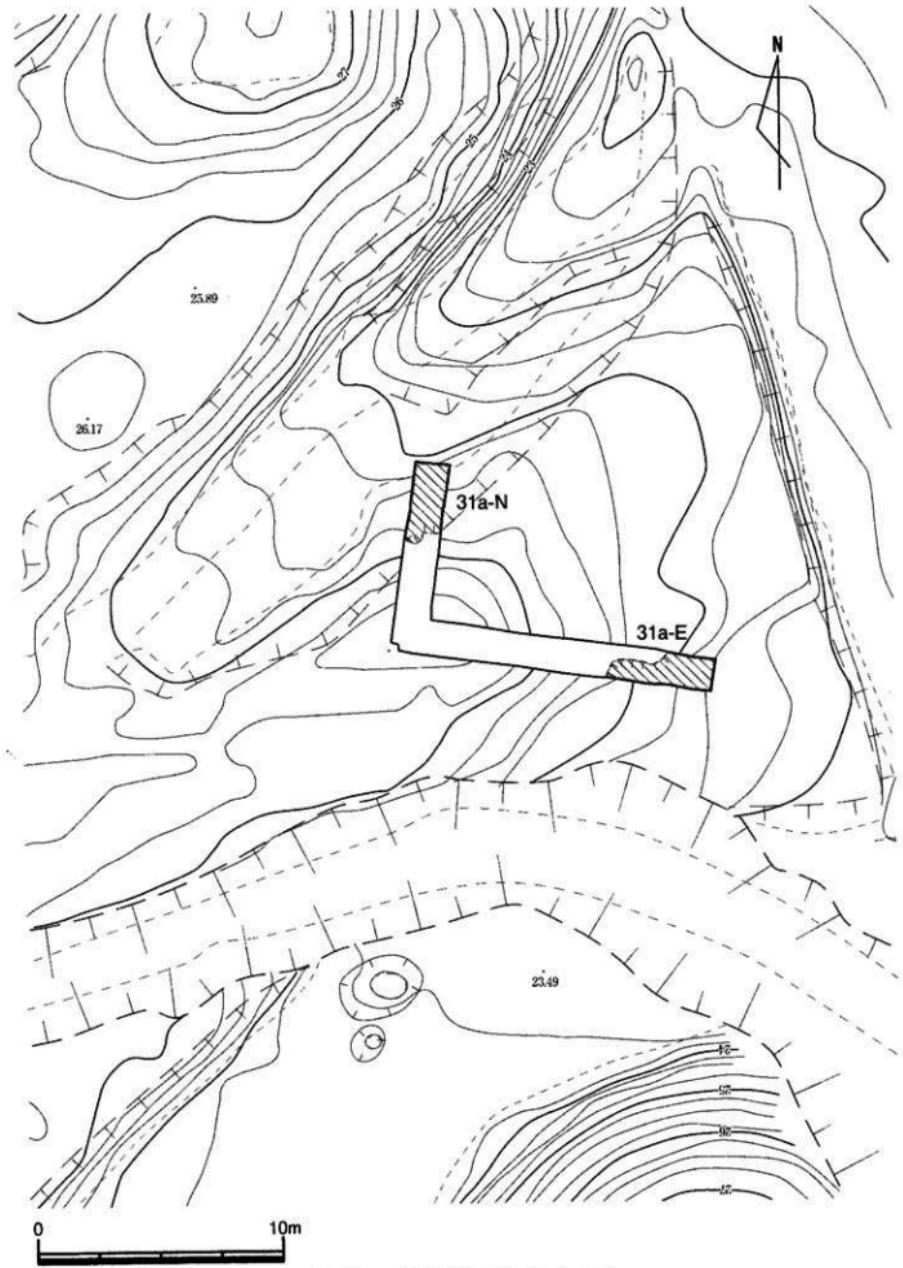
第14図 17年度31号墳調査位置図 (1/1,000)

### 2. 平成17年度の調査結果

#### 31a

調査は墳頂付近から現状で削平を受けていないように見られる北方向に巾1.5m、長さ7.5m(31a-N)、東方向に巾1.5m、長さ13m(31a-E)にのびるL字型トレンチを設定した。調査の結果、双方とも高原スコリア火山灰を含む黒ボク土層(基本層序Ⅲ層)下位で盛土が確認された。31a-Nでの端部付近は搅乱され削平を受けており、搅乱の深さは暗褐色土(Ⅳ層)まで至っている。この搅乱坑の壁面では、アカホヤ(Ⅵ層)、黒色層(Ⅴ層)が確認でき、その上位に盛土が堆積する状況がある。

31a-Eでも同様に端部付近に現地表面より深さ30cm削平する搅乱坑がある。その搅乱坑の底面ではアカホヤ(Ⅵ層)が確認でき、搅乱坑の西側では自然堆積層である黒色土(Ⅳ層)下位より古墳構築層である黒色土(Ⅴ層)が確認され、31a-Nと同じくこの上位に盛土が堆積する。これにより、墳丘として捉えるのが妥当と考え、生目31号墳とした。周溝部は搅乱による削平を受けており不明である。今回の調査では、墳丘規格は判別できず、遺物の出土も皆無であった。今後の調査で墳丘形態を明らかにしていく必要がある。



第15図 31号墳調査区全体図 (1/200)



図版2 5 Va (北西より)



図版3 5 Vb (北西より)



図版4 5 Vc (北西より)



図版5 E号地下式横穴墓 (5 Va検出)



図版6 F号地下式横穴墓 (5 Va検出)



図版7 G号地下式横穴墓 (5 Vb検出)



図版8 H号地下式横穴墓（5Vc検出）



図版9 14a（墳端から墳丘に向けて）



図版10 14d（周溝から墳丘に向けて）



図版11 14d（前方部平坦面から後円部に向けて）



図版12 14d（前方部平坦面からのスロープと後円部2段目）



図版13 14d（後円部1段目テラス）



図版14 14d (後円部墳頂平坦面)



図版15 14d (埴輪検出状況①)



図版16 14d (埴輪検出状況②)



図版17 14d (西側くびれ部)



図版18 14i (周溝から墳丘に向けて)



図版19 27号墳 (東より)



図版20 27a (周溝から墳丘に向けて)



図版21 27a (周溝内)



図版22 27a (周溝から墳丘に向けて)



図版23 31号墳 (東より)



図版24 31a-E (墳丘外から墳丘に向けて)



図版25 31a-N (墳丘外から墳丘に向けて)

# 報告書抄録

ふりがな	しせき いきめこふんぐん						
書名	史跡 生目古墳群						
副書名	保存整備事業 発掘調査概要報告書VI						
巻次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第65集						
編著者名	樋岡洋道・井上誠二						
編集機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL (0985) 21-1836						
発行年月日	2007年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	コード 所在地	北緯 市町村	東經 遺跡番号	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因	
生目古墳群	宮崎県 宮崎市 大字跡 江	45201	5 付近	20051201 20060330	3号墳・5号墳 周囲堤 238.0m <sup>2</sup>	保存整備	
					14号墳 118.1m <sup>2</sup>		
					27号墳 27.5m <sup>2</sup>		
					31号墳 27.5m <sup>2</sup>		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構等		主な遺物	特記事項	
生目古墳群	古墳群	古墳時代	3号墳・5号墳周囲堤 周堤 地下式横穴墓5基		土師器片	周堤上で3号墳周囲から5号墳に向かって玄室設ける地下式横穴墓を確認 後円部が2段築成であることを確認。 埴丘斜面には葺石、テラス面、後円部埴頂平坦面、前方部平坦面に敷石と埴丘全体を円錐の砂岩で覆う。 後円部平坦面、前方部平坦面から後円部と接続するスロープ上で歪な形の壺形埴輪の樹立を確認。壺形埴輪は單口縁と複合口縁がある。	
			14号墳 埴丘葺石・敷石・埴輪列		埴輪	後円部平坦面から後円部と接続するスロープ上で歪な形の壺形埴輪の樹立を確認。壺形埴輪は單口縁と複合口縁がある。	
			27号墳(旧13号墳) 埴丘盛土、周溝		土師器甕片	埴丘であるか否かの確認調査を行ない、埴丘であることが確認された。円墳の指定であるが、方墳の可能性もある。	
32号墳(未指定墳) 埴丘盛土、周溝			埴丘であるか否かの確認調査を行ない、埴丘であることが確認された。				

# 史跡 生目古墳群

保存整備事業 発掘調査概要報告書VII

2007年3月

発行 宮崎市教育委員会